

きありがたいございました。私に与えられた任期中、ご期待に応え、私の選挙公約である、北極動物園の開園、幻のサンロング島発見のため、全力を尽くします。

これもなんだかおかしい。選挙の公約だという北極動物園には、いったいどんな動物が入るのだろうか。想像できるのは白熊くらいだ。それに「サンロング島」とは、どんな島なのか。世界中の空を飛行機や偵察衛星が飛び回る現代に、まだ発見されていない幻の島などあるのだろうか。

記事は、このほかにも、凍った息のコンクール、大寒波エネルギーを使った発電機の広告、全館氷でできたクリスタルホテルのオープンなど、風変わりな記事であふれている。中でも凍った息のコンクールというのが変わっている。あんまり寒いので人間が吐く息が一人一人漫画のふきだしのように凍ってしまうらしい。人によって色も形も違う、その美しさを競うという。

いったい、これはなんだろうか。なぜ自分あてにこんなものが届いたのだろう。最近、学校では何も良いことがなく、すっかり落ち込んでいた。まるで、そんな心の隙間をふさぐかのように、この手紙はどこからかやってきたのだ。そもそもベーリング市はどこにあるのか。こんなとき、一番頼りになるのはインターネットだ。

リビングには家族みんなの共用のパソコンがある。いつも使っている検索サイトに「ベーリング市」と入力してみ

た。あつという間に、たくさんの記事がヒットする。アラスカとシベリアの間のベーリング海峡は有名ならしい。その中から「ベーリング市とは」と書いてあるサイトを開いてみた。

「ベーリング市 かつて、ある詩人が詩の中で存在を予言した、架空の市の名前」

とある。どのサイトもみんな似たり寄ったりだ。架空の市とは、どこにもないという意味だろう。

翔太は、ベーリング市だよりを前にして、すっかり考え込んでしまった。

翔太は学校へ行くのがとても苦痛だった。六年生になるまで、学校がいやになったことなど、ただの一度もない。学校を一日も休んだことのないのが自慢だった。

いやになった理由は、はっきりしている。クラスのみならず徹底したシカトを受けているのだ。休み時間に遊んでくれる友達は、一人もいないし、学校から帰るのも一人授業の中では先生の指示で、グループ分けには入っているけれど、だれも翔太を無視した。そして、翔太以外のメンバーで集まって大事なことは決めてしまう。これが一番こたえた。自分がいないところで決められては、何もできない。

翔太は朝学校へ行こうとすると、決まっておなかが痛く